http://www.ne.jp/asahi/chonan/kenkyu/　　mail : ch0330@support.email.ne.jp

全国長南会通信 71号

事務局　：　300-0301 茨城県稲敷郡阿見町青宿 930　長南秀則　TEL/FAX　029-887-3190

発行日 ： 令和 04 年 04 月 08 日

山形庄内 知憩軒 味な旅　鶴岡市 長南光

令和 4 年 1 月 28 日、ＮＨＫＢＳのドキュメンタリー番組「新日本風土記」で、山形庄内地方の食文化について、放映された。その中で、知憩軒の長南光（みつ）さんが、民宿の食事作りや食材の紹介など、インタビューにも答えている。

藤沢周平の小説の中に出てくる、庄内の料理の話も交えながらの、興味深い内容だった。

知憩軒

「荘内の酒と肴」

私は、かねがね荘内の馳走のうまさは、素材のうまさではないかと考えている。魚一尾、枝豆ひとさやの味覚が優れているのである。

長年東京のお世話になっていて、こういうことを言うのは申し訳ないのだが、私は魚のまずさに一驚を喫した記憶がある。（藤沢周平）

冬の知憩軒

番組は、庄内地方の山の幸、海の幸、庄内米、旧酒井藩の現代の当主や祭りなどを紹介するもので、約 1 時間の内容。その中で、光さんは食材の調達や料理、民宿の食事の紹介などを伝えている。ところどころに藤沢周平の小説の庄内の御馳走の話が紹介されている。素朴な庄内地方の味のある知憩軒とそのおもてなし料理である。

淡紫色、しゃきしゃきとおいしい「もってのほか」

山形県は、食用ぎく（刺身などのつま用の小ぎくを除く）の生産が盛んで東京都中央卸売市場で扱う5割程度を山形産が占める。

特に、独特の香りと味の良さで『食用ぎくの横綱』と評されるのが、淡い紫色の「もってのほか」だ。正式には「延命楽」という品種だが、県内では「もってのほか」の愛称が一般的。この名は、「天皇家の御紋を食べるとはもってのほか」とか、「もってのほかおいしい」といったことから転化したらしい。

もってのほか

ごぼうが煮えてきた。「だしも入っているし、カルシウムも入っているし、ごぼうってすごく出しが出る。ストーブでコトコト水分がなくなるまで煮る。実は手はそんなにかかっていなくて、火と時間が働いてくれる。」と光さん。煮るのも冷ますのもたっぷり時間をかければ、汁に溶け出した旨みが全部具に帰って行く。どれも子供のころから親しんだ味だ。この近くで育った藤沢周平もきっと舌鼓を打った味が並ぶ。

民宿を始めたのは24年前。もともとは農家の女性が集まって習字をしたりお茶をたてたりする集会所が始まり。軒下で憩いながら知識を深める. .「知憩軒」と知り合いが名付けてくれた。

山沿いの温海地区でとれた赤蕪が手に入ったので、甘酢漬けを作る。地元で代々守られてきた在来作物が、他に

もだだちゃ豆、民田なすなど60種類もあるという。漬けあがるまでは10日ほど。

「三屋清左衛門残日録」

「この赤蕪がうまいな。」

町奉行の佐伯熊太は、おかみが運んで来た蕪の漬物にさっそく手をつけた。

「わしはこれが好物でな。しかし、よく今頃まであったな。赤蕪というのは大体、これから漬けるものじゃないのか」

「そうです、よくご存じですこと」

（藤沢周平）

旬の赤蕪で作るなます。

光「食材の味が違うんだよね。普通の在来種でないのは、形と色は野菜だけど、香とか匂いとかは薄くできてるの。誰にでも食べられるような味に改良されている。在来種は匂いとか香とかクセがあるの。だから好きな人は病みつきになる。庄内の人たちは自分たちの味をしってるから、自分たちが食べる分だけでも作り続けてきた。」

山と海で周囲と隔てられている庄内だからこそ地元の美味しさを大事にする。前述の「もってのほか」は、さっと湯がいて酢の物にする。子供のころから親しんだ味の料理を作り、客に提供する。藤沢周平も親しんだ味だ。

光「藤沢周平の小説がなぜこんなに人気があるのがわかるような気がするのは、架空の食べ物ではないから。藤沢さんが実際にここで食べてきたものが出てるじゃない！棒鱈（ぼうだら）とかね、それこそ民田なすとか、孟宗とか。みんな藤沢さんの周辺でとれるもの。グルメじゃないだろうけど、普通が一番、当たり前が一番！だから、毎日食べても飽きない。美味しいものは、美味しいけど毎日食べたら飽きるんですよ！」

前左から 成、光、清 後ろ 秀則 照光 2014 年

「狐剣用心棒日月抄」

「なに、漬物とな？」
「里心がおつきになりましたか？」
「いや、そうは言っておられんが、江戸は食い物がまずい。食い物の話になると国を思い出すの」
二人は夢中になって国の食い物の話をした。
（藤沢周平）

「蝉しぐれ」

農事のことは依然として半分もわからなかったが、文四郎にも穂を持ちはじめた稲の美しさはわかった。それは、ずっと樫村や同僚、村人の稲の生育を見守る気魄のようなものを見てきたせいだった。稲作に限らず、総じて農事はやり直しのきかない、真剣勝負のようなものだということも悟った。1 年に 1 回だけの勝負である。
（藤沢周平）

源平時代の長南氏

長南氏は上総介の支配する上総国の長南に、927 年から住んでいましたので上総介に任命された人の多い千葉氏とは親しい間がらで両氏の間では縁組もしばしば行われたようです。千葉体系図を見ると、1074 年に千葉常長の子、常末（つねすえ）という人が、長南左衛門尉（さえもんのじょう）の家へ婿入りして家をついだと書いてあります。

この頃長南氏の若者は 1051 年から始まった前九年の役や 1083 年からの後三年の役にも千葉氏の軍勢に加わって、東北地方の各地で戦いました。

そしてそのあと保元・平治の乱とつづいて兵馬が走り回るので世の中がさわがしくなりますが、1167 年には平清盛（たいらのきよもり）が天下を統一して太政大臣になります。清盛は関東地方の平家の一部が新天地を求めて伊勢に渡った平家一族の出身です。

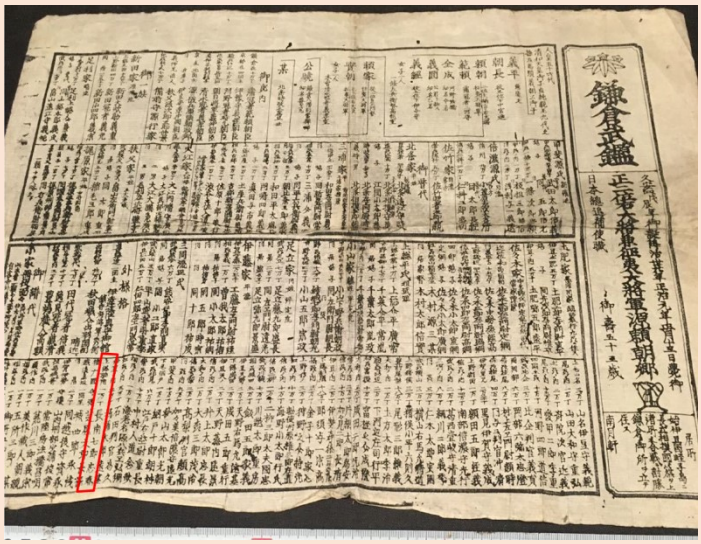
平治の乱に敗れた源義朝の子、頼朝は伊豆半島に送られ、その弟義経は鞍馬寺にあずけられましたが、やがて寺を逃げ出して関東地方をかくれ歩いて家来を集めました。関東地方には源氏の仲間が多かったので、かなり集まったことでしょう。

長南忠春もそのひとりです。

（中村就一著 長南氏の歴史物語より ）

今、ＮＨＫ大河ドラマで「鎌倉殿の 13 人」が放映中だが、いよいよ義経が参戦して源平の合戦が活気づいてきたが、長南七郎忠春が、江戸時代に描かれた源平ものの錦絵の中に義経と共に出てくるので、ドラマに長南氏が出てくることを期待しているところであるが、鎌倉時代は、戦国時代、江戸時代のように飛び抜けて有名な武将が少ないので、わかりにくい。これから、義経と郎党が活躍する場面になるので毎週楽しみに見ている。先日、名張市の江南氏からタイミングよく鎌倉殿と長南氏に関連する資料が送られてきた。江南さんありがとうございます。ドラマをより面白く見るためにも、改めてこの時代の勉強をして、予習をしながら鑑賞していきたいと思う。

鎌倉殿と長南氏　名張市 江南 正



鎌倉武鑑の中に上総庁南一万石 **長南七郎忠春**が出て来る。鎌倉英勇鑑では上総国一万石 **長南七郎忠清**が出て来ている。鎌倉武鑑の方 39 名多いが、どちらもほぼ同じﾒﾝﾊﾞｰであること又中村先生の長南氏の研究で【鎌倉幕府初期時代に庁南殿庁北殿（鎌倉の南北二館）に住む幕府の重職を努めた人で長南七郎忠清（鎌倉武鑑による。禄高不明）】というのがあるとするならばこれは何を意味するかと考えると、兄弟説ではなく、同一人物ではないだろうか。

数少ない文献だけで判断しずらいが、『源平闘諍録』第五巻にある頼朝挙兵時に上総氏の一部族として治承 4 年 9 月(1180 年)武蔵国で参陣した中に長南太郎重常が登場して来るが、その 3 人の子 次郎久常、三郎常泰、七郎親常も同行したと思う。その後太郎重常は隠居し、次郎久常が家督を継ぐが、これが長南次郎光重であると思う。

頼朝時代分限帳には上総国 5 万石、長南次郎光重が出て来るが、何故か鎌倉武鑑には出て来ない。武功を上げたものに恩賞として領地を安堵するなら鎌倉武鑑にあってもおかしくない、次に三郎常泰は分からないが、最後の七郎親常は来満七郎を称している、来満は蔵持で長南町蔵持の地で長南七郎とも呼べる。親常は実名なので仮名を名乗った。これが長南七郎忠春か或いは長南七郎忠清ではないだろうか。鎌倉幕府の重職を務めたとは結局禄高が上総国 5 万石分の奉公をして兄弟 3 人で分けたのではないか、何故なら鎌倉武鑑にあって頼朝分限帳に出て来ないから長南七郎忠清（鎌倉武鑑による。禄高不明）というのはそれを意味するのではないだろうか。

尚、実名ではなく仮名を名乗ったのは、親の名前を継承、先祖に重複を避けた、同性同名が多い等の理由があったのでは

例えば

那須与一	十一男として生まれたので十余る一
源義経	九郎
源義家	八幡太郎
源為朝	鎮西八郎

長男-> 太郎 次男-> 次郎、二郎
三男-> 三郎 四男-> 四郎

		太郎	次郎	三郎	四郎	五郎	六郎	七郎	八郎	九郎
源氏	実名 仮名	源義平 悪源太	源朝長 松田冠者	源頼朝	源義門	源希義 土佐冠者	源範頼 蒲冠者	阿野全成 醍醐禅師	源義円	源義経 九郎冠者
北条氏	実名 仮名	(早世)	(早世)	北条宗時 三郎	北条義時 小四郎 四郎の息子					
上総氏	実名 仮名	伊西常景 伊西新介	印東常茂 印東次郎	匝瑳常成 三郎	佐是円阿 四郎禅師	大椎惟常 五郎	埴生常益 六郎	天羽秀常 天羽直胤	上総広常 介八郎	相馬常清 相馬五郎
長南氏	実名 仮名	(早世)	次郎久常 次郎光重	三郎常泰	(早世)	(早世)	(早世)	七郎親常 七郎忠春 七郎忠清		

鎌倉時代の長南氏

和暦	西暦	月日	
治承 4 年	1180	08/17	頼朝挙兵
	1180	08/23	石橋山の戦い
		08/28	敗北し船で安房国へ
	1180	10/14	富士山麓の戦い
	1180	10/20	富士川の戦い
	1180	11/22	金砂城の戦い
寿永 2 年	1183	03/18	野木宮合戦
	1183	06/01	篠原の戦い
元暦元年	1184	01/20	宇治川の戦い
	1184	03/04	粟津の戦い
	1184	03/20	一の谷の戦い
文治元年	1185	01/10	藤戸の戦い
	1185	02/01	葦屋浦の戦い
	1185	02/19	阿波国勝浦の戦い
	1185	03/22	屋島の戦い
	1185	04/15	壇ノ浦の戦い

長南太郎重常
推定 50 歳

↓

隠居

長南次郎久常
推定 25 歳

↓

家督相続
上総国
長生郡長南町

↓

来満七郎親常
推定 16 歳

↓

家督相続
上総国
長南町蔵持
別名長南七郎忠春
として各地に参戦

↓

梶原景時と共に鎌倉に帰還推定 21 歳以後 5 年間の動きがない

梶原景時から、下記の書状が頼朝に届く。

判官どのは君（頼朝）の代官として、その威光によって遣わされた御家人を従え、大勢の力によって合戦に勝利したのにもかかわらず、自分一人の手柄であるかのように考えている。

平家を討伐した後は常日頃の様子を超えて猛々しく、従っている兵達はどんな憂き目にあうかと薄氷を踏む思いであり、皆真実に和順する気持ちはありません。

自分は君の厳命を承っているものですから、判官殿の非違を見るごとに関東の御気色に違うのではないかと諫めようとすると、かえって仇となり、ややもすれば刑を受けるほどであります。

幸い合戦も勝利したことなので早く関東へ帰りたいと思います。

腰越状

↓

1192 頃
別名長南七郎忠清として鎌倉佐介谷近辺に住居（庁南殿、庁北殿）
推定 28 歳

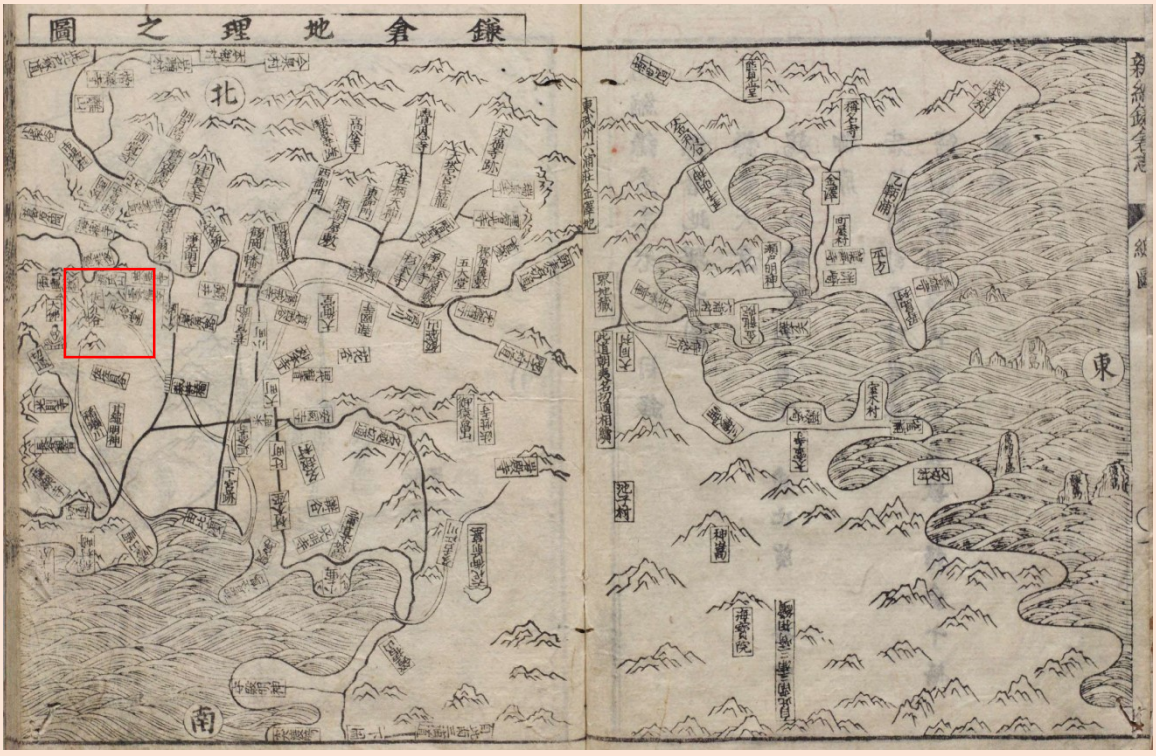
1205 頃
北条執権の障害となる有力御家人になり鎌倉を去る
推定 41 歳

庁南殿庁北殿について

中村先生の長南氏の研究で鎌倉幕府初期時代に庁南殿庁北殿『鎌倉の南北二館』に住む長南七郎忠清（鎌倉武鑑による。禄高不明）というのがある。この鎌倉の南北二館とはどこか、当然上総介の配下にあった事よりその傍に住んでいたはずである。

ここに鎌倉地理図に佐介谷がある。　現在　〒248-0017 神奈川県鎌倉市佐助付近

この佐介谷に上総介、千葉介、三浦介の３介が住居すとあるので、長南七郎忠清もここに居たと判断する。



東大寺年領五師賢寛申状案　黒田荘大番役催事　建長元年 6 月 18 日東大寺文章による。

東大寺伊賀国名張郡黒田庄者

是より先、伊賀守護代清忠、「姓闕く、」東大寺領同国名張郡黒田荘住人名張頼直を、京都大番役に催す、是日、東大寺年預五師賢寛、衆議に依り、六波羅北条長時に、同荘住人に対する大番催促の停止を求む、御家人役を勤仕することは住宅焼却、作田没収に値する罪科である。

この伊賀国黒田荘は周囲が山に囲まれ宇田・名張両川を挟む盆地で耕作する候補地として東大寺が平安末期から農地増加を図るために墾田私有から寄進する荘園に積極的に進出してきた。

他領主に服属することを禁じていた事と過剰な年貢を要求する東大寺に対して抵抗せざろう得なかった。

黒田荘預所和興裁許状案　弘安 10 年 10 月　1287 年 11 月～12 月　東大寺文章による。

大江氏の江新太夫が東大寺に忠功したのでそれ以来一族は皆下司以下黒田荘の諸職につく長南忠宗はその後に於いて政治的に離脱した訳ではないが、上総には不帰黒田荘に土着した。武士道の一瞬を生きる魂は残っていたかもしれないが、その掟『死ぬ事を見付けたり』から解き放たれ、田畑を耕し、種を播き、収穫し、子や孫に恵まれた平穏な生き方を見つけたと思う。その子が六郎、孫が平七入道である。

黒田荘有徳人交名注進状案　長南忠宗　長南六郎　長南平七入道
嘉元２年１月14日　　57歳　　45歳　　25歳

姓が長南から江奈古に変わった時期は不明であるが、多分大江氏との血縁関係で江を貰ったと思われる。それから277年の時が経ち、長年にわたる東大寺の荘園領主としての黒田荘支配も天正９年，織田信長の伊賀攻めで終止符が打たれる。村々の集落は焦土と化し兵火を逃れた戸数はわずかに16戸と伝えられている。

徹底抗戦し家族４人戦死しているので完全に帰農した訳ではなく土豪族として敵が乱入して来た時は戦った。江奈古としては十八代目まで続いたが、嫡男が無く弟が長南氏の南を取って江南に改姓したと思われる。

織田信長の死後、豊臣秀吉の刀狩令により江奈古一族は武士と農民の分断に迫られ、やむなく武士として生きる者は城下町に移住した。藩主　藤堂高虎の時代には追放者、亡命者を呼び戻された。城下町に住む江南家は藤堂家家臣となり、村に住む江南家は庄屋として幕末まで続いた。　　名張市史による。

平氏→源氏→北条氏→足利氏→織田氏→豊臣氏→徳川氏と続き

領主を滅ぼし、その国の政治における主権を握ろうとする権力闘争は形は違うが今の世も同じ権力に対する欲望が産んだ執着で本当に大切なものは何なのかを考えさせられる。長南年恵と同じような能力のあるお坊様から忠宗が祖宗と云うお墨付きを頂いたが先祖が残した『我が祖宗は長南七郎忠清の孫と云う』言葉を紐解くと以上になる。

江南彦佐衛門文章による。

令和４年度　年会費納入のお願い

振替用紙を同封しますので、年会費１口2,000円をお振り込みください。
郵便局のキャッシュカードをお持ちの方は、振替用紙を使用しないでＡＴＭから次の口座にお振り込みください。

全国長南会　　記号　１０６５０　番号　１３０８５７１１

ＡＴＭからだと、手数料（会負担）が無料になります。

全国長南会の運営のため、ご協力お願いします。

不要不急外出自粛新コロナ
不要不急帰省先送り
三密を避けてこの時期コロナ策
マスクウーマン妻さえも見間違え
コロナ禍に出歩くこともままならず
コロナ禍に遠出かなわず近くのみ
新コロナいつまで続く世界中
拳と拳挨拶するこの時節
新コロナ桜も恐れ散り急ぎ
新コロナ記事のない日はいつのこと

長南俊春